

学校相談員の職務満足感尺度の作成 —不登校・相談室登校児童生徒と保護者に対する支援に注目して—

○漆畑典子（群馬医療福祉大学）

鈴木由美（聖徳大学）

キーワード：学校相談員，不登校支援，職務満足感

問題と目的

不登校児童生徒が増加する中，その対応策として公立学校内の相談室に非常勤などの相談員を配置する自治体が見られる。学校で活動する相談員は，児童生徒の学校適応に向けた支援や保護者からの相談にあたっている（漆畑・鈴木，2019）。相談員は勤務時間や勤務日数が少なく，校内連携や保護者相談のためにサービス残業せざるを得ないなど，悪条件の中での勤務となる。しかし相談員など非正規職員の職務満足感の研究はほとんどない。よって本研究では，公立学校を主なフィールドとして活動する相談員を学校相談員とし，学校相談員の職務満足感尺度を作成し，その構造を探り検討することを目的とする。

方 法

調査対象者 3 県の，学校相談員 236 名に質問紙を配布した結果 138 名から回答を得た。

質問紙 職務満足感尺度（田中，1997）および人間関係に関する満足感測定尺度（安達，1998）の「職務内容」から，学校相談員の現状と合う 11 項目について，「会社」を「職場」に変えるなど学校相談員の状況に合わせて文言を一部変更して用い，4 件法で回答を求めた。

結 果

11 項目に対して主因子法，プロマックス回転による因子分析を行った結果，7 項目による 2 因子が抽出された（Table 1）。第 1 因子は，相談員自身の能力発揮に関する内容を表す項目に高い負荷を示したため「能力発揮感」と命名した。第 2 因子は，職務や職場に自分自身がコミットメントしている内容を表す項目に高い負荷を示したため「コミットメント感」と命名した。

AMOS24.0 を用いて確認的因子分析を行ったところ，適合度は $\chi^2=11.12$ ， $df=8$ ，GFI=.979，AGFI=.904，CFI=.994，RMSEA=.056 であり，基

準をみたしていると判断した。各下位尺度の α 係数を算出したところ第 1 因子で $\alpha=.85$ ，第 2 因子で $\alpha=.73$ ，であり，内的整合性が示された。

考 察

Herzberg (1966) は動機づけ—衛生理論の中で，達成，承認，仕事そのもの，向上，成長などの動機づけ要因による満足感は持続性があると述べている。本研究においても承認，仕事そのもの，成長など，動機づけ要因による満足感の項目が抽出され，持続性のある満足感であると考えられる。また，学校相談員はひとり職でありながら対応困難な支援にも取り組むため，専門知識の修得や自己研鑽も欠かせない。相談員自身が努力して向上させた能力を発揮することにより，良い結果を得たという実感が，動機づけ要因のひとつである達成となっていると考えられる。

Table 1 学校相談員の職務満足感尺度の因子分析結果

	I	II
I 能力発揮感 ($M=2.83$, $SD=0.51$, $\alpha=.85$)		
1 今の仕事は自分の能力（判断力や問題解決能力，専門知識）を発揮することができ満足している	1.03	-.09
2 今の仕事は自分の技能や能力を活かすことができ満足している	.82	.12
10 私の仕事ぶりは職場のみんなから認められている	.51	.13
II コミットメント感 ($M=3.47$, $SD=0.51$, $\alpha=.73$)		
4 私は今の仕事に興味を持っている	-.11	.95
6 私はこの職場に勤めていることを誇らしく思う	.08	.63
5 私は仕事を通して全体として成長した	.19	.55
11 来年度も今の仕事を続けたいと思う	.13	.39
下位尺度間相関	.53*** (***) $p<.001$	
因子間相関	.55	

引用文献

漆畑典子・鈴木由美（2019）. 学校相談員の活動内容尺度の作成—不登校・相談室登校児童生徒と保護者に対する支援に注目して— 日本教育心理学会第61回発表論文集 p406